

資料

シロサポテ *Casimiroa edulis* Llave et Lex. の栽培

1. 導入と増殖法について

石畑清武・遠城道雄・野村哲也・福留紘二・福村和則・長野幸男

(1994年9月20日受理)

Cultivation of White Sapote, *Casimiroa edulis* Llave et Lex.

1. Introduction and Propagation

Kiyotake ISHIHATA, Michio ONJO, Tetsuya NOMURA, Koji FUKUDOME,  
Kazunori FUKUMURA and Sachio NAGANO

緒 言

指宿植物試験場の年平均気温は18.3℃、冬季の最低平均気温は5.3℃、最低極温は-3.0℃である<sup>10)</sup>。著者らはかねてよりこの気温の下で栽培及び果実生産のできる生態的特性を有すると思われる果樹を対象に「指宿地方で産地化が見込まれる熱帯果樹類」の探索を行っている。

シロサポテは亜熱帯性果樹でありながら-5℃まで耐えうる<sup>6,7,20)</sup>強い耐寒性を有していることからこの種の導入が行われてきた。シロサポテ White sapote, *Casimiroa edulis* Llave et Lex. はメキシコ、グアテマラなど中央アメリカの標高1,000~2,000 m 地帯を原産<sup>12,16)</sup>とするミカン科シロサポテ属<sup>1,11)</sup>である。この果樹の他の一般名として Cochil sapote, Sapote, Mexican apple (英), Zapote blanco, Chapote, Matasano (スペイン), Zapoti, Zapota branco (ポルトガル) 等の呼称がある<sup>4,9,11,17)</sup>。

栽培の沿革史

果実は原産地のメキシコ、グアテマラ地方では古くからインデオによって食用に利用されていた<sup>11)</sup>。1810年頃メキシコからカリフォルニアに導入され、その後フロリダ、ハワイへ伝えられた<sup>11,17)</sup>。アジアでは1899年にスリランカへ導入され、1941年には台湾で初めて結果した<sup>14)</sup>。ブラジルのカンピーナスへは1970年に導入・栽培された<sup>9)</sup>。近年、ニュージーランド、オーストラリア及びイスラエル、南アフリカ等でも経済栽培果樹として取りあげられつつある<sup>4,7,16,21)</sup>。

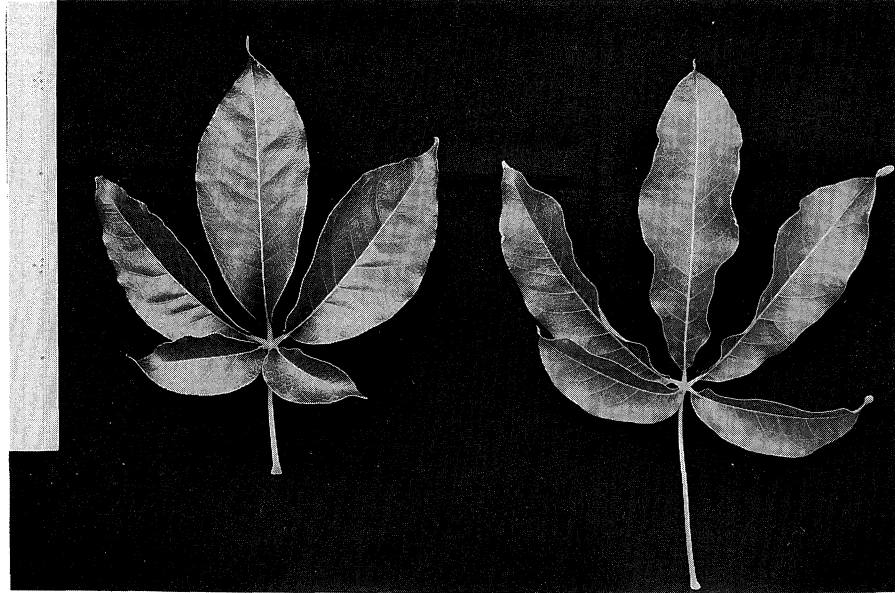
日本への導入の歴史は明らかではないが、1960年に種子がハワイから指宿植物試験場へ導入され、その実生木が標本樹として栽培維持されてきた。この標本樹には数年に1~2個の果実が得られたのみであり、これまで実用化の検討は行なわれないまま推移してきた。しかし、無加温ビニルハウス内で寒害を受けることもなく生長を続けてきており、これは指宿地方における利用性について検討してみる必要性を示唆していると思われた。

現在シロサポテの主要な生産地はカリフォルニア及びフロリダであり、カリフォルニアでは一時

期この果実を利用し、アルコール製造が検討されたと言う。

### シロサポテの特性

形状：樹高15～18mに生長する常緑樹。葉は3～7枚の小葉からなる掌状複葉で(第1図)、各小



第1図 シロサポテの葉。

左：品種 White, 右：品種 Kagi.

Fig. 1. Leaf characters of white sapote.

Left : cv. White, right : cv. Kagi.



第2図 シロサポテの花型(×3)。

左：子房小型, 右：子房大型。

Fig. 2. Flower types of white sapote. (×3).

Left : small ovary type, right : large ovary type.

